秀ノ山　雷五郎　―小さな体で大横綱に―

横綱秀ノ山雷五郎（本名 辰五郎）は、気仙沼市最知川原の百姓久吉の五男として生まれました。幼いころからその怪力ぶりが大評判で、大人たちが五斗俵一俵（約七十五キログラム）をようやくかつぐのに、辰五郎は両手に一俵ずつをやすやすとかかげて運んだといわれるほどでした。

辰五郎はその力自慢を生かし、相撲取りになりたいという夢をもっていました。辰五郎には、地元の草相撲で大関として大活躍をしていた自慢の兄がいたからです。辰五郎はそんな兄に強いあこがれをいだいていました。

秀ノ山雷五郎の銅像（気仙沼市波路上岩井崎園地内）

辰五郎十六歳のとき、兄たちは本吉郡の力士たちを引き連れ、岩手県気仙郡盛（現在の岩手県大船渡市）の力士たちと勝負するため、遠征することになりました。辰五郎も相撲が取りたくてしかたがありませんでした。いっしょに行くことを断わられましたが、兄にはないしょで遠征軍についていきました。

盛に着くと、相撲会場にはたくさんの人が集まっていました。辰五郎はその人たちにまぎれながら、兄たちの取組を応援しました。ところが、どうでしょう。本吉の力士たちは、辰五郎の目の前で次から次へと負けていくではありませんか。ついには、辰五郎の自慢の兄さえも負けてしまいました。

一斗…昔の量を表す単位。一斗は十升で、約十八リットル。

草相撲…しろうとの相撲。

辰五郎は、とっさに土俵に駆け上がり、相手側の大関に飛びかかりましたが、あっさり土俵にたきつけられてしまいました。何度飛びかかっても、あっという間に投げられてしまいます。辰五郎がとてもかなう相手ではありませんでした。

辰五郎は、世の中にはこんなにも強い力士がたくさんいることを初めて知りました。そして、相撲取りになることを決心し、江戸に出ることにしまいました。

「親方にお目通りを……。どうかわたしを弟子にしてください。お願い申します。」

辰五郎は、来る日も来る日も、足を棒にし、相撲部屋を訪ね歩き、頭を下げました。しかし、体が小さいうえにわずか十六、七歳の田舎者。紹介してくれる人もない中で入門を許す相撲部屋などあるはずがありません。やっとの思いで住みこみで働くことが許された相撲部屋では、稽古どころか炊事や子守の雑用ばかりで、すぐに放り出されてしまいました。

江戸時代とはいえ、力士は二メートルほどもあるような大男で皆怪力ぞろい。辰五郎の身長は、一六四センチメートル。体が小さく体重も軽く、だれが見ても力士には不向きな体格だったのです。

希望を失った辰五郎は、二年もの間いろいろな土地をさすらった末に、身も心もぼろぼろになって、八木宿（現在の栃木県足利市）の油問屋の前にたどり着きました。

「お願い申します。どうかわたしをここで働かせてください。何日も飯を食っていないのです。」

油問屋の主人高木源之丞は、辰五郎の丈夫そうな体つきと力がありそうな姿を見て油絞めの仕事にはうってつけだと思い、雇い入れました。辰五郎にとっては、ふるさとをはなれて初めて人の心の温かさにふれ、自分のことを認めてもらった瞬間でした。辰五郎は、どんな苦しい力仕事でも黙々と働きました。そんな辰五郎の姿は、いつしか源之丞の目に留まるようになりました。

『油絞め』（油締め）…蒸した菜種や胡麻を樽製の絞り器に入れ、上から圧力をかけて油を絞る作業のこと。

ある日、辰五郎は源之丞に呼ばれて部屋に行きました。

「辰五郎や。おまえは、本当に一生懸命よく働いている。ありがとう。ところで、おまえは将来、どんなことをしたいのだ。このまま油絞めをしていてよいのか。」

辰五郎は、胸に秘めていた相撲取りへの思いを涙ながらに源之丞に話しました。一生懸命な働きぶりと、初めて知った相撲取りへの思いに心打たれた源之丞は、相撲部屋に入門できるように働きかけてやることを約束しました。

源之丞は、江戸に仕事があるたびに、また、ときには辰五郎のためにわざわざ江戸に出向き、わずかなつてを頼りに、当時の横綱、秀ノ山伝治郎のもとに入門できるように働きかけました。辰五郎は、源之丞の姿が見えなくなるまで見送り、どんなに夜遅くなっても、どんなに天候が悪くても、帰りを待ちました。そして、今までにも増して、仕事に精を出しました。

ついに、辰五郎は源之丞の力添えで相撲部屋での力士としての生活ができるようになったのです。

体が小さく体重の軽い辰五郎だけに、それを克服するためには、もともと持っていた力をさらに強くし、技にみがきをかけることしかありません。相撲界に入った辰五郎にとっては、どんな稽古の厳しさも苦しくはありませんでした。自分が相撲界に入れたのは源之丞のおかげであり、源之丞への感謝を一日たりとも忘れることはありませんでした。

歩みは遅かったものの、持ち前の努力と粘り強さで辰五郎は、じりじりと番付を上げていき、関脇時代には、四場所全くの負け知らずの三十連勝の大記録を達成するまでになりました。また、大関時代には、六場所でわずか三敗しかしないという好成績を残すほどの勝負強さを発揮しました。

ついに、辰五郎は、師匠の名前をいただき四股名を「秀ノ山」と改め、入幕後八十八勝十四敗の好成績が認められ、「秀ノ山雷五郎」として第九代横綱に上りつめました。秀ノ山、三十八歳のときでした。三十八歳といえば、今の相撲界では、すでに現役を引退して相当の年月がたつほどの年齢です。相撲界の最高峰である横綱となるまで、

『つて』…
頼りになる人。知り合い手がかり。

関脇…
相撲の番付で横綱、大関の次の地位。

四股名…
相撲の力士の名前。

『横綱昇進の年齢（三十八歳）』
昭和時代の大横綱大鵬・北の湖等の現役引退の平均年齢は三十一・五歳、初土俵から引退までの年数は平均十七年である。

相撲取りになろうとしてからすでに二十二年もの年月がたっていました。

土俵に上がる横綱秀ノ山雷五郎には、いつも大声援がおくられました。

二百四十年間ほどの江戸時代の相撲界で横綱になれたのは、わずか十二人であり、江戸時代後半の名だたる横綱の中で、秀ノ山は、八割四分二厘と最もよい勝率を誇る大横綱となりました。

平成二十三年三月十一日の東日本大震災の大津波で、秀ノ山の生家付近も大きな被害を受けました。けれども、今も生家の近くの岩井崎には、彼の銅像が遠く太平洋に、そして未来に向けて右手を大きく伸ばしてすっくと建っています。

横綱　秀ノ山雷五郎
（財団法人 日本相撲協会蔵）

秀ノ山 雷五郎

現在の気仙沼市最知川原に生まれた辰五郎（秀ノ山雷五郎）は、子どものころから怪力で有名だった。江戸の相撲部屋に苦労の末に入門した辰五郎は、血のにじむような練習を続け、十九年をかけて、とうとう横綱まで上りつめることができた。生家の近くの岩井崎の公園には、辰五郎の功績が称えられ銅像が建てられている。

『二百四十年』…伝説の初代横綱明石志賀之助の初土俵1624年から江戸時代最後の横綱陣幕久五郎が横綱に昇進した1867年の間。